

企業名：井関農機

レポート名：ISEKI レポート 2022

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

長期ビジョンのキャッチコピーである SDGs への貢献を意識した『「食と農と大地」のソリューションカンパニー』が統合報告書の最初のページに大きく掲載されており、井関グループが目指す姿がどのページに示されているかポイントとしてまとめられているため非常に理解しやすかった。また将来についてのビジョンだけでなくそれを達成するためのマテリアリティも特定プロセスを公開し、そのリスクと機会や実際の活動状況もともに報告していることでビジョン達成にむけて本当に動いているのかを確認できて信頼感が生まれた。中期経営計画では「お客さまに喜ばれる製品・サービスの提供」を通じ豊かな社会の現実へ貢献するという基本理念と、農家を過酷な労働から解放したいという創業理念を踏まえた上で時代にあわせて製品だけでなく情報やノウハウにも力を入れると報告している点で企業の柔軟性が感じられた。進捗状況の報告では数字として良い結果を残していることから長期ビジョンの達成が現実的に捉えられた。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

井関グループの競争優位性は井関グループの強みとして統合報告書 27-30 ページに主にまとめられていた。技術力、連携によるイノベーション、営業提案とサポート力の3つを柱としてこれを強化するための人材育成にも取り組んでいると述べていた。開発、生産、販売とサービスの各部門でどのような施設が使用され主な研修内容も公開されていたが実際に何名ほどが資格を取得できたか、実際の研修生の声などがあるとより良いものになると考える。強みの一つである技術力に関しては2020年特許の日本における特許分野別登録数第2位、特許取得率（全産業中）第1位という結果から客観的にも競争優位にあることが伺える。しかし連携によるイノベーション、営業提案とサポート力の点の紹介では競合他社との比較情報がなく強みが絶対的なものになっていないかの配慮がもう少し欲しいように感じられた。強みを掛け合わせた取り組みとその実証実験ではほとんど数値目標以上の結果が残せており強みの成長に成功していることが分かった。井関グループは2025年に創業100周年を迎える歴史ある企業であるが長く事業を展開してきたからには歴史の浅い競合他社より培われたコネクションが強みとしてあげられるかと予想したがその点については目立った記載がなく疑問に思った。またこの企業がなくなった時のことを考えた場合同様に農機をあつかうクボタ(6326)や丸山製作所(6316)、ヤンマーホールディングスなどの企業があり農機自体がなくなることはありえないだろう。しかし井関グループが力を入れている人材育成のノウハウやDBJ環境格付けで16回連続で最高ランクを実現しているような農業を通じた環境への配慮が消えることは社会にとって損失になると考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

以上で述べたように井関農機の競争優位性は農機という財自体よりもそれに付随する環境への配慮や人材育成への取り組みといった点にあると考えられる。また持続性という点ではどちらの取り組みも今後の展望を記載していることから一過性のものではないことが読み取れる。しかし人材育成というのは結果が目に見えるものではないからこそ競争優位性であるとしてはかることが難しいと思われる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

上記したように人材育成に力を入れている井関農機で自身の心的資本の価値向上が達成できる機会は豊富にあると考えられる。統合報告書 51-56 ページで井関農機が行っている人的資本への投資について述べられており、従業員エンゲージメントの向上と人事の変革を基本戦略としている。人材活性化委員会の招集やエンゲージメントサーベイによる従業員の意見の抽出が現在行われていることに加え、今後の展望としてグループ会社へのシステム拡大や従業員のスキル管理システムの導入、360度評価の実施が挙げられており人材育成の取り組みが停滞せずに推進されている。また職種にかかわらず多様性や働き方改革などが以前より求められている印象があるが、フレックスタイム制やテレワーク制度、介護休暇取得や男性の育児休暇取得の推進などを積極的に行っている。このような取り組みは従業員の生産性の向上に寄与すると考えられる。また技術等を競うコンテストの開催や技術検定、資格取得コースの設置などの取り組みを通して人的資本向上の余地はあるだろう。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

報長期ビジョンや大切にしている価値、ポイントがはじめに述べられていることでその後の事業紹介や今後の展望が井関農機のビジョンを達成するために合理的なものか、必要なものかがこの企業に詳しくない人が統合報告書を読んでも想像できた点が良かった。農機業界が一般人には身近ではないからこそ投資家などに興味を持ってもらうため簡潔に取り組みが述べられていることが求められるが、その点でも読みやすい報告書だった。またプロジェクト参加者の実際の声や従業員の声が多く掲載されていたりどの程度営業目標が達成されているのかを図を用いて視覚的に表現していたりすることで説得力が生まれ良かった。一方で改善余地も挙げられる。アンケート結果が良かった点だけしか書かれていなかったところはそうする場合全体のアンケート結果を公開すべきだと思う。また上記したようなクボタや丸山製作所など同業界の競合他社に対して相対的にどのような強みがあるのか、また相対的に劣っている点をどのように補い改善していくのかについての記載があると企業の弱みが記載されていたとしてもより報告書として信頼感が生まれると考える。また既存の取り組みと今後の取り組みについてはよく記載されていたがその過程で行われているとおもわれるフィードバックは省かれていることが多く今後の取り組みに既存の取り組みの反省はどのように生かされているのかが